



こんにちは  
日本共産党  
市議会議員

# 辻おさむ

## です

### 市政レポート

2011年10月29日 No.174 発行 / 辻修 尼崎市大庄西町2-22-5 Tel.6417-7424  
ホームページ <http://www.poporo.ne.jp/~o-tuji/>

## 被災地ボランティアに参加して 福島県いわき市

日本共産党兵庫県委員会 第8次ボランティア派遣



13 日午前8時に神戸を乗用車で出発。いわき市は、福島県の一番南ですが、それでも距離は、750キロメートル。東名高速の渋滞もあり、現地についたのは、夜の11時半でした。その日は、何もできずに就寝です。

### まず仕分け

14 日午前中は、物資の仕分けです。兵庫県から持ってきた米4袋を3キログラムづつに小分けし、

10月13日から5日間、福島県いわき市への日本共産党兵庫県委員会第8次ボランティアに参加しました。なかなか日程が合わずにようやく被災地入りが実現しました。ボランティアには、まさき一子市議もふくめ、4名の参加です。レポートします。



タオルや衣類、石鹸などを整理しました。

ところが、米袋を開けたら、何と「玄米」です。JA横のコイン精米機で手持ちの100円玉をかき集めて精米です。

精米所には、地元の人も来ていて、話を聞くと「今年の新米を買って良かった。放射能が出なくて良かった」「そんなのあっても福島の米がいちばん」と言っていました。ただ「子どもは心配だ」「孫は線量計を支給してもらって、首からかけている」と言っていました。

# 原発への怒り次々に

15日、16日は、いわき市内につくられた隣接する楢葉町の避難者用仮設住宅の訪問です。楢葉町からの被災者は、福島第1原発から20キロ圏内なので避難されてきた方たちです。

## 農家が米を 作れない悔しさ

農業をしていた男性

は、「今年の米の出来はいいらしい。本来なら実った穂が見れたのに」と涙ぐんでいました。農家が米を作れない——こんなに悔しいことはないでしょう。

訪問先では「作業着のまま避難した」「冬服がない」「失業して仕事がない」「など、避難を余儀なくされた状況を悔しうに訴えられました。89歳の一人暮らしの

女性は、「東電に手紙をだしたい」といつていました。

「仮設で死にたくない」といつておられた85歳のご夫婦は、「事故前、東電は決して危険とは言わなかった。共産党は40人〜50人ぐらいになつて、政治を動かしてほしい」と激励されました。

また、健康のために「仮設住宅の仲間でグラウンドゴルフをしている」と楽しそうに話していた男性は、原発の話になると顔が険しくなりま

す。それほど、原発にたいしての怒りの強さを感じます。

また仮設住宅は「風呂のエプロンが高いうえ、手すりがないので出られない。風呂で30分も泳いでもがいた」「郵便受けが雨で濡れる」など、要



望をお聞きして現地のセーターにお伝えしました。

## 原発がなければ

2日間で用意した67袋のお米を届けることができました。これから冬を迎えることへの不安の声も多く、「地震・津波にも家は無事だった。原発がなければ、こんな生活をやらなくてもよかったです」という声が耳に残ります。

## 救援物資の 街頭配布

最後は、お米、タオルや石鹸など、もつて来た物品をブルーシートにならべ街頭配布です。厚紙を巻いて即席のメガホンで呼びかけ、持ってきた物品の大半をお渡ししました。「丹波の農家から預かってきたお米です」と紹介すると大変喜ばれました。



【上】数種類のタイプが並ぶ高久仮設住宅

【下】仮設住宅を訪問する辻おさむと、まさき議員





# 津波の威力 実感

いわき市海岸沿いの被災地  
を見て回りました。

## ●久之浜（くのはま）

津波のほかに火災もあつた地域で、道路の海岸側には、家の基礎コンクリート以外に何もありません。よく見ると、自動車の形をした錆びた鉄の塊が、いくつか見えまです。自動車の燃えたあとです。

地元の人「津波のあと、火事があつたが、ガレキで消防が動けなかつた」といっていました。防潮堤のコンクリート



## ●四倉（よつくら）

が欠けており、近くに大きな石が転がっています。大石を運び、コンクリートを壊す波の力に驚かせられます。

漁港です。少し離れたところに、被災した船が、たくさん積み上げられています。人影はありませんが、漁協の事務所には、「祈 四倉の豊



## きれいな公園なのに ホットスポットだらけ



公園の植え込みで測定

かな海を返せ 原発の早期収束を」と書かれた横断幕が掲げられています。町の入り口にはいくつもの大漁旗が。



## ●塩屋岬

美空ひばりさんの唄で有名なところですが、建物が解体中で「立ち入り禁止」でした。



手持ちの線量計では尼崎で0.1マイクローシベルトです。いわき市のボランティアセンター前では0.3でした。

昼食場所にした仮設住宅近くの公園の空間も0.3でしたが、座っていた花壇をはかると、なんと! ぐんぐん上がって、茂みで0.9、地面で1.6です。

きれいな公園なのに:放射能は見えないだけに罪作りですね。

## 原発事故から見えた日本の 原発政策、放射能汚染と健康被害

立命館大学国際平和  
ミュージアム名誉館長 安斎育郎さん

10月20日、尼崎医療生協組合員広場で、安斎育郎（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長）さんを招いての学習会に300人余が参加しました。



「放射線を浴びるとガンの当たりくじを買ったようなもので、多く浴びると当選確率は上がるが、少しでも当たらないとは限らない：」「放射線は浴びないに越したことはない」と説明。

その上で、「100ミリシーベルトでガン死亡が0・5%アップする」「理性的に怖がる」ということが大切だと力説しました。また「食品の汚染をこまめに監視し、実態を把握し、防護措置をとり、健康管理をしっかりとやらう」と訴えました。

## 原発安全神話の崩壊と 代替エネルギー

元京都大学原子炉実験所教員 岩本智之さん



10月22日、保険医協会北阪神支部主催で、元京都大学原子炉実験所教員岩本智之さんの講演がありました。

岩本氏は「原発は、放射性物質を閉じ込める5つの壁があるから大丈夫といわれていたが、福島第1原発事故では、すべて壊れた」「2006年に日本共産党の議員により地震・津波の危険性が指摘されていたので想定外とはいえない」と安全神話を批判。

その上で「電力不足対応に太陽光発電は有効」「風力や地熱、バイオマス、中小水力など、地域にあった自然エネルギーのミックスが大事」「自然エネルギーで日本の電力の大部分をまかなうことは、現実的な費用で十分可能」と訴えました。

## 「あまの水」作成

尼崎市水道局は、災害時に備えた備蓄用としてアルミボトル缶を作成しました。

東日本大震災では尼崎市も水道局が被災地にタンク車をたす支援をおこないました。尼崎では、ボトル入りの水を作成していなかったため、救援物資として持って行くことが出来ませんでした。

アルミボトル缶は、5年間の長期保存が可能です。

